

テラ支配の下には多くのゲルマン要素が含まれてゐて既にガリア侵入以前に、或る程度までゲルマン化してゐたことが確かめられる。永久的定着生活につれてゲルマン化は當然より一層進展すべきである。現に同じくアジア民族であるアラニー族は全くゲルマンに同化した結果當時の人々はローマ人もゲルマン人も之をばゲルマンと區別してゐない。アツテラ侵入の意義は舊史家が想像したやうなキヤタストロフ的性格にあるのでなく、ゲルマン諸族の勢力關係並に配置を一變したこと、ローマ帝國にとつて最も危険なる存在であつた東部ゲルマン諸族を萎縮せしめて間接に帝國崩壊過程を延長した點にあると考へられる。即ち匈奴帝國の出現と雖も民族大移動を貫く一般的潮流の裡において理解されるべきもので、之に對する例外現象とすべきでない、吾人は考へ度いのである。この意味において私は、ロート氏の見解に賛同し得ない。氏が動もすればアルファン(Hudren)氏と同様にゲルマン民族移動をば、ノルマン侵入、スラヴ、マジヤール侵入、蒙古侵入などと共に廣義の移動の裡に含めしめんとする傾向を有つ點についても同様に私は承服出来ないのである。

かのフエリクス・ダーンの古典的名著以來或はゲルマニスト、或は歴史家、或は考古學者の側から現れたゲルマン研究の文獻は決して少しとはしない。今世紀においてもシュミット、コッシナ、ドブシウ諸家の研究は既に十九世紀的研究段階に對して瞭らかに今世紀的段階を標識してゐること周知の如くである。然し乍ら、ゲルマン研究は直ちに民族移動の研究ではない。民族移動は一個の世

界史的段階であり、従つてその研究も普通史的見解に基かなければ根柢の淺薄なものとなることを免がれぬ。一九二八年故ベリール氏の牛津大學における講義の致後出版はかやうな世界史的時代として取扱はれた民族移動史の好個の概観を提供するものであつた。ロートの此の著述は之に對して敢て質的に優れたものと考へることは出来ないけれども、量的にはたしかに一段と綿密豊富にして且つ、整備したものといふことが出来る。私が此の著によつて得た悦びは今世紀の民族移動研究も、今やこのやうな体系的叙述に統一され得るまでの状態に一應安定して來たといふ一事である。(鈴木成高)

Of. Meinecke: Die englische Primamantik des 18. Jahrhunderts als Vorstufe des Historismus.

(H. Z. 152. Heft 2. 1935.)

すでに吾國に於いても知られてゐるやうに、マイネッケは此の第一五二巻を以て、Hist. Zeitschr. の編輯者の地位を退き、次の第一五三巻から H. A. von Müller がこれに當ることとなつた。此の第一五三巻の末尾に附せられた報告が云つてゐるやうに、マイネッケは、此の雜誌の第七二一七六巻の五巻を H. Z. 152 及び H. v. Treitschke と共に共同編輯する任に當つて後、一九〇〇年以降は唯一の責任監輯者として此の雜誌の發展に努力した。即ち「彼は三十五年間以上にわたつて此の Hist. Zeitschr. の精神的指導者であり、今までに刊行された巻數一五二の半以上は、編輯者としての彼の名を記載してゐる」のである。彼がこの指導者として

の地位を退くといふことは、そこに政治的な意味——ナチス政府の直接的な壓力——があつたか、なかつたかは今の場合別問題として、とも角も彼自身にとつて感慨無量といふところであらう。此の第一五二巻即ち自己の名を冠する最後の號に、彼が記載したのが、「歴史主義の前段階」としての十八世紀英國の「Präromantik」と題する此の論文なのである。

然しながら、此の論文が吾々にとつて興味があるのはそのやうな意味に於いてではない。

すでに一九二七年に發表された有名な論文(H. Z. 17, Heft 1.)に於いて、歴史の中に「因果を探究せんとする立場と、價値を理解し・表現せんとする立場」との對立を止揚せんと試みながらも、尙此の二つの傾向の間の均衡は、もはやランケに於いて可能であつた如くには理想的には行はれ得ないであらう。何故なら現代の諸情勢と現代の思考方法の「Problematik」が……(ランケの時代に於けるが如き)調和を破壊してしまつたからである」と云ひ、また次いで Hist. Zeitschr. の第一五〇巻及び H. v. Treitschle 生誕百年を記念する巻頭論文(H. Z. 150, 1934.)に於いて、現代歴史主義の危機を痛感しつゝ、「ナチスの革命は最も遠く Vorzeit から根を發してゐるところの血と民族との力によつて擔はれてゐる……すべての獨逸の歴史家は、此の積極的な成果(ナチス革命の成功)をば承認するであらうし、また喜びを以て之を促進することが出来るであらう」とナチス的言辭を吐いたマイネッケが、今後果してどのやうな途をとつて進むのであらうかと云ふことは

吾々に多大の關心を持たせるに充分な問題であつた。それ故、新しく發表された此の論文は、彼のその後の動向をいくらかでも示すものとして吾々に興味深く思はれるものなのである。

だが、此の論文に先だつてすでに彼は「Shafesbury und die Wurzel des Historismus」と題せられた論文を發表して居り(Sitzungsberichte der Preuss. Akad. d. Wiss., Phil.-hist. Klasse, 1934, VII.)、此の中に於いて彼は「歴史主義の根源の一つが Shafesbury にまで遡及し得られる」ことを見たのであつたが、これに續いて、廣く十八世紀英國の Präromantik を「歴史主義の前段階として」眺めやうとするのが、今度の論文である。それ故後者は前者の延長上に在ると云つて差支へないであらう。此の二つの論文を併せ考へるとき、吾々は、現在の立場を失はないマイネッケにとつては「現代歴史主義の諸問題」が最近の彼の最も重大な關心事をなしてゐることを推察し得ると同時に、また彼が此の問題を飽くまで歴史的研究の中に於いて解決しやうとしてゐるところに、彼の歴史家としての良心的な努力見ることが出来るであらう。

さて、此の論文に就いてであるが、これは大體として、前半(S. 250—S. 272)と、後半(S. 272—285)との二つの部分から成つてゐる。そして前半の冒頭は、問題の提出に當てられてゐる。

「大なる精神的運動が新たに昂揚し、自己を貫徹し、生活を支配する場合、それは成程しばしば自己に對立するあらゆるものをば少くとも暫しの間抑壓するところの絶對的な性格をとるやうに

見えるものであるが、しかし事實に於いては、もしひとが精確に眺めるならば、何らかの他の種の・そして異つた傾向の力がすでに最初からその中に、それと相並んで、またその下に跡づけられることが出来、そして此のものが前者を越えてより遠き未來を望見し、……何時かはそれと交代すべく運命づけられてゐる——と云ふやうな場合が稀ではない」十八世紀は、一つの新しい精神力が一定の間見上は絶對的に勝利を得てはゐるが、しかしその凱旋の當初からすでに一つの對立的な傾向がそれに隨伴して居り、そして此れが後になつて前者と交代すると云ふやうな經過の最大の實例の一つである。啓蒙及び合理主義の世紀は、決して唯單にかゝるものゝみであるのではなくして、むしろ十九世紀に於いて、ロマンティックとして・非合理主義及び歴史主義として發芽すべき萌芽をば、すでに最初からその胎内に宿してゐたのである」(S. 256)

「然し、かゝる兩極性は、唯單に大體としてのヨーロッパ精神生活の發達を規定するのみならず、むしろまた個々の民族の生活せばそれ自身のうちに於いて規定するものである。各々の民族はその性格の兩極性、即ち相對立せる諸傾向をば自らのうちに包蔵してゐるものである」。例へば、「宗教戰爭の時代に對する反擊を導き入れたところのあの啓蒙精神が、ロック、ヒューム、その他の人々を通じて Emphism 及び Sensualism の形態をとつたと云ふことは、純粹に英國的であつた。併しまた、英國の Nationalcharakter たる "Common sense" に對する對極が、——即ち吾々は之を全

然概括的に且つ皮相的に romantisch-ästhetisches Bedürfnis と名づけたのであるが、そのやうな一つの Elms が——啓蒙精神の凱歌の下に於いて、唯單に死滅しなかつたのみならず、むしろ半ば目覺めつゝ生き永らへ、そして徐々に再び自己の正當な權利を主張することが出来た、と云ふこともまたひとしく純粹に英國的であつた。十八世紀の初頭、即ち尙英國の啓蒙の最盛期以前に於いてすら、此の種の最初の大きな感情が Shaftsbury に於いて示されたのである」。

——いま吾々がこゝで此の論文の詳細を具體的に逐次的に紹介し得る紙幅を有しないことは遺憾であるが——とも角、此の様な立場に立つて、彼はその前半に於いて先づ十八世紀英國の一般的な思想傾向をば殆んどすべての部門にわたつて論じつゝ、續いてその後半に於いて、Edmund Burke の思想をあらゆる角度から検討してゐるのである。そして最後に Burke の歴史思想を「歴史主義の觀點から見ること」を以て、此の論文を終つてゐる。

(中山)

#### ○Henri Pirenne と Henri See 兩教授の計

最近西歐の社會經濟史學界は相次いで二人の權威を失つた。一人はベルギーの H. Pirenne、他はフランスの H. See である。兩氏とも自國に於ける泰斗であるのみでなく、國際的にも亦知名の碩學であつた。此處に兩氏の業績を簡單に紹介して以つて追論の微意を表した。

Henri Pirenne (1862<sup>12</sup>/7<sup>21</sup>—1935<sup>10</sup>/7<sup>23</sup>) 教授の著作目録は、教授